

# ラベル付けアルゴリズムにおける agreement の定義

谷 川 晋 一\*

## 1. はじめに

本稿では、Chomsky (2013, 2014) において提唱されているラベル付けアルゴリズム (Labeling Algorithm: 以下、LA) において、素性の agreement がどのように定義されるべきかについて論じる。Chomsky (2013, 2014) の枠組みでは、従来の枠組みとは異なる理論や仮定が提案されているが、その中でも、最も大きな提案といえるのが LA である。LA におけるラベル付けの仕組みは、今後、生成統語論研究において非常に興味深い帰結をもたらすと考えられる。しかしながら、LA に関連する提案や仮定の一部は、詳細な議論が欠落しており、その部分を明確化し、LA の精緻化を行うことなしには、今後の生成統語論研究は進展しないと考えられる。本稿で焦点を当てる素性の agreement も、LA で重要な役割を担うと考えられていながらも、詳細な議論がなされていないものの一つである。本稿の目的は、素性の agreement に適切な定義を与え、LA の精緻化を行うことで、筆者の今後の研究も含めた生成統語論研究への理論的な貢献を行うことである。

本稿の構成は、以下の通りである。まず、2 節では、Chomsky (2013, 2014) の枠組みを、LA に焦点を当てながら、概説する。ここでは、特に、素性共有

---

\* 福岡大学言語教育研究センター外国語講師

によるラベル付けの仕組みを重点的に見ていく。次に、3節では、LAにおいて重要な役割を果たすとされていながらも詳細な議論がなされていない agreement と matching の区別について論じ、LA を精緻化する。具体的には、併合された2つの要素の両方に解釈不可能素性が存在し、その両方が相互的に削除される場合のみが素性の agreement として位置付けられ、この意味での素性の agreement が生じなければ、適切なラベル付けが行われないと主張する。そして、本稿が提案する素性の agreement の定義によってのみ、移動に関するいくつかの事実を LA の観点から適切に説明できることを示す。最後に、4節では、まとめを行う。

## 2. Chomsky (2013, 2014) の枠組み

2節では、Chomsky (2013, 2014) の枠組みを、LA に焦点を当てながら、概説する。2.1節では、従来までの枠組みにおける仮定とは差別化され、かつ、この枠組みにおいて重要性を持つ自由併合と LA について概説する。2.2節では、LA に関する仕組みにおいて興味深い仮定がなされている2つの機能主要部に関する分析を概説する。

### 2.1. 自由併合と LA

2.1節では、Chomsky (2013, 2014) の枠組みにおいて弁別的な仮定と言える自由併合と LA について概説する。

Chomsky (2013, 2014) の枠組みは、いくつかの弁別的な仮定を採用している点において、Chomsky (1995) からの約20年の間、提唱されてきた枠組みと大きく異なる。本稿では、その仮定のうち2つに焦点を当てる。1つ目は、移動を含めた併合は自由に適用されるという自由併合 (Free Merge) に関する仮定である。従来の枠組みにおいて、少なくとも移動は、素性照合の結果、EPP 素性や端素性 (Edge Feature) によって、誘発されると仮定されていた。

よって、移動を含めた併合を自由に適用するという仮定は、従来の枠組みからの非常に大きな脱却と言える。移動に関する従来の枠組みと現行の枠組みの違いとして、T 指定部への名詞句の A 移動を例示することにする。まず、従来の枠組みでの (1a) に対する分析として、Chomsky (2008) の分析を例示する。

(1) a. John likes cats.

- b. [<sub>CP</sub> C<sub>[uφ]</sub> [<sub>TP</sub> T<sub>[uφ]</sub> [<sub>v\*P</sub> John<sub>[φ]</sub> like cats ]]]
- c. [<sub>CP</sub> C<sub>[uφ]</sub> [<sub>TP</sub> John<sub>[φ]</sub> T<sub>[uφ]</sub> [<sub>v\*P</sub> <John> like cats ]]]

Chomsky (2008) では、(1b) に示すように、フェーズ主要部 C が TP と併合した後、C にある解釈不可能な φ 素性 [uφ] が T へと継承される。この T に継承された [uφ] が c 統御する領域内で一致する素性を探索し、結果として、v\*P 端にある名詞句 *John* が持つ解釈可能な φ 素性 [φ] と照合関係に入る。この照合により、*John* が T の持つ EPP 素性 [EPP] を充足する要素となり、(1c) に示すように、*John* の T 指定部への移動が誘発されることになる。次に、現行の枠組みでの分析として、Chomsky (2014) の分析を例示する。

(2) a. John likes cats.

- b. [<sub>TP</sub> John<sub>[φ]</sub> T [<sub>v\*P</sub> <John> like cats ]]
- c. [<sub>CP</sub> C<sub>[uφ]</sub> [<sub>TP</sub> John<sub>[φ]</sub> T<sub>[uφ]</sub> [<sub>v\*P</sub> <John> like cats ]]]

Chomsky (2014) では、自由併合が仮定されているため、DP が移動する際に、その移動を誘発するような素性や動機付けは必要ない。したがって、(2b) に示すように、*John* の v\*P 端から T 指定部への移動が、動機付けなしに、先に生じてよい。この移動が生じた後、フェーズ主要部 C が TP と併合し、(2c) に示すように、[uφ] が C から T へと継承される。最後に、T に継承された [uφ]

が *c* 統御関係にある *John* の  $[\phi]$  と照合関係に入る。

以上のように、Chomsky (2013, 2014) の枠組みでは、自由併合が仮定されているわけであるが、ここで一つ注意したい点がある。それは、移動を含めた併合が自由に行われてよいとしても、すべての併合が派生の収束につながるとは限らないという点である。移動が生じた結果、それが派生上の破綻をもたらす場合もある。この点を考える上で不可欠なのが、もう一つの弁別的な仮定として考えられるラベル付けアルゴリズム (LA) である。Chomsky (2013) は、LA に関して、(3a, b) のように記述している。

- (3) a. For a syntactic object SO to be interpreted, some information is necessary about it[.] Labeling is the process of providing that information. (Chomsky (2013 : 43))
- b. [T]here is a fixed labeling algorithm LA that licenses SOs so that they can be interpreted at the interfaces, operating at the phase level along with other operations. (Chomsky (2013 : 43))

(3a, b) に従うと、併合によって形成された統語要素は、適切に解釈されるように、情報を付与される必要があり、その情報を付与する過程がラベル付けである。そして、インターフェースにおいて適切な解釈を受けられるように統語要素の認可を行うのが LA である。これは、他の操作と同様にフェーズ (位相) 単位で適用されることになる。

LA がいかなる操作であるかについては、Chomsky (2014 : 4) に端的な記述があり、それを要約したものが (4) である。

- (4) LA, a special case of minimal search, seeks heads H within its search domain. It must take place at the phase level, as part of the Transfer op-

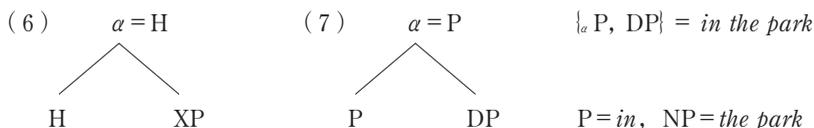
eration.

(4) の記述によると、LA は、最小探索の一種で、フェーズ毎に探索領域内の主要部 H を探索する操作ということになる。Rizzi (2015) は、Chomsky (2014) よりも少々踏み込んで、(5) のように述べている。

(5) Labeling [A]lgorithm: The category created by Merge inherits the label of the closest head. (Rizzi (2015: 321))

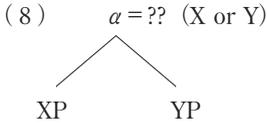
(5) の記述に従うと、LA は、併合によって形成された範疇が最も近い主要部のラベルを付与される操作ということになる。

以下では、LA がどのように機能するかを、具体例を用いながら示していく。まず、主要部 H と非主要部 XP が併合して得られる要素  $\{H, XP\}$  では、(6) に示すように、主要部 H のラベルが付与されることになる。

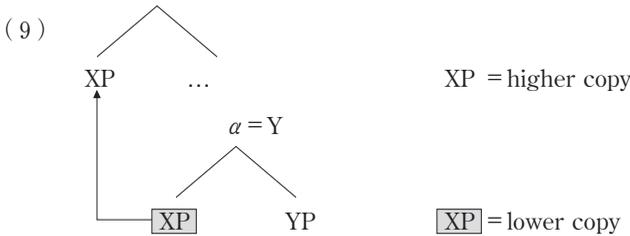


H と XP を比較した場合、XP の主要部である X は、H よりも深い部分にあり、Hの方がより近い主要部とみなされるため、H が  $\{_{\alpha} H, XP\}$  のラベルとして選択される。例えば、(7) に示すように、主要部 H が P である *in* で、非主要部 XP が DP である *the park* の場合、その 2 つが併合して前置詞句 *in the park* が得られるが、その併合要素  $\{_{\alpha} P, DP\}$  には P のラベルが付与されることになる。LA において最も単純にラベル付けがなされるのが、主要部と非主要部が併合した  $\{H, XP\}$  である。

他方、LAにおいて複雑な仕組みが必要となるものの、非常に興味深い帰結を持つのが、2つの非主要部 XP と YP が併合された  $\{\alpha \text{ XP, YP}\}$  の場合である。



XP と YP は、それぞれ、X と Y を主要部としており、どちらも同じ程度の深さにあると考えられるため、最も近い主要部が事実上、2つ存在する。この状態だと、そのどちらが  $\{\alpha \text{ XP, YP}\}$  のラベルになるかを選択・決定ができず、そもそも、LA では、2つの非主要部が併合する際に、(8) に示すように、ラベルを決定できないことになってしまう。<sup>1</sup> この問題を回避し、適切にラベル付けを行うための解決策として、2つの方法が提案されている。1つ目の方法は、XP もしくは YP のいずれかを移動させる方法である。XP と YP が併合した後、XP が移動している例として、(9) を参照されたい。



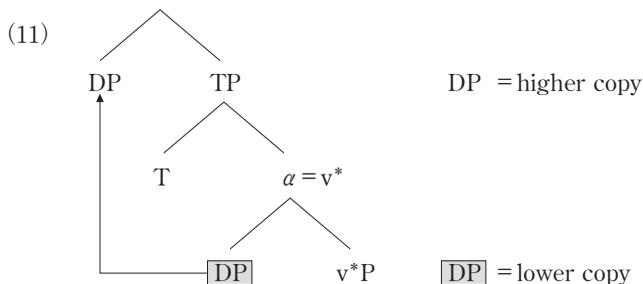
コピー理論に従うと、XP が移動した場合には、元位置と移動先の両方に XP のコピーができることになる。Chomsky (2013) は、(10) に示すように、2

<sup>1</sup> 本稿では、適切なラベル付けができない場合を、(8) のように、記号??によって表記する。

つのコピーのうち元位置にある下位コピーは、LA にとって非可視的だと仮定している。

- (10) The intuitive idea is that the lower copy of XP is invisible to LA, since it is part of a discontinuous element, so therefore  $[[XP, YP]]$  will receive the label of YP. (Chomsky (2013 : 44))

この仮定に従うと、 $\{XP, YP\}$  から XP が移動することによって、移動元の XP の下位コピーは、LA にとって非可視的となる。そうすると、LA に可視的な要素は YP しか存在しないことになるため、その主要部 Y が  $\{XP, YP\}$  のラベルとして必然的に選択されることになる。<sup>2</sup> 移動によりラベル付けが可能になる例として、(11) に示す動詞句内主語が挙げられる。



動詞句内主語仮説に従うと、他動詞文や非能格動詞文の主語 DP は、 $v^*P$  の端に基底生成され、そこから T 指定部に移動することになる。移動前の状態では、DP と  $v^*P$  が併合した構造  $\{DP, v^*P\}$  が存在しているため、移動が生じなければ、そこにラベルが付与されない。その後、T が  $\{DP, v^*P\}$  と併合

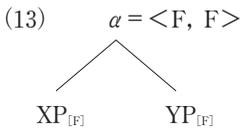
<sup>2</sup> 下位コピーの可視性に関しては、Chomsky (2014) において少々異なる仮定がなされている。Chomsky (2014) の仮定については、(10) と併せて、3.2 節で提示する。

し、DPがT指定部に移動すると、この移動により、元位置にできるDPの下位コピーはLAにとって非可視的となる。結果的に、DPが移動した後の $\alpha$ には、LAにとって唯一可視的な $v^*P$ の主要部 $v^*$ のラベルが付与される。

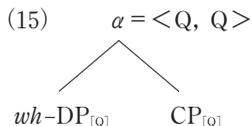
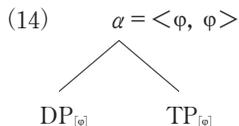
次に、 $\{XP, YP\}$  にラベルを付与するための2つ目の方法を見ていく。2つ目の方法は、これまで見てきた最も近い主要部という観点ではなく、素性共有 (Feature Sharing) という観点からラベルを決定する方法である。この方法に関しては、Chomsky (2013: 45) に端的な記述があり、それを要約したものが (12) である。

(12) Searching  $\{XP, YP\}$ , LA seeks the most prominent feature, and takes that to be the label of  $\{XP, YP\}$ .

例えば、XPとYPが共通してFという素性を持つ場合、この共有された素性がLAにとって最も顕著な素性となり、(13) に示すように、 $\langle F, F \rangle$  という形式が  $\{XP, YP\}$  のラベルとして付与されることになる。



ここでは、素性共有によるラベル付けの具体例を2つ挙げる。主語DPがTPと併合し、 $\{DP, TP\}$  が得られる場合 (14) と *wh* 句がCPと併合し、 $\{wh\text{-DP}, CP\}$  が得られる場合 (15) である。



まず、DP と TP が併合する (14) では、従来の理論的枠組みから一般的に仮定されてきたように、DP と TP の両方が  $\varphi$  素性  $[\varphi]$  を持つ。DP と TP が  $[\varphi]$  を共有していることにより、この素性が LA にとって最も顕著な素性となり、 $\{ \alpha \text{ DP, TP} \}$  に  $\langle \varphi, \varphi \rangle$  のラベルが付与されることになる。他方、*wh* 句が CP と併合する (15) では、*wh* 句が DP である場合、 $\{ \alpha \text{ wh-DP, CP} \}$  が得られる。Wh 疑問文の場合には、*wh* 句と CP の両方が Q 素性  $[Q]$  を持つという一般的な仮定に従うと、*wh*-DP と CP が  $[Q]$  を共有していることにより、結果的に、 $\langle Q, Q \rangle$  が  $\{ \alpha \text{ wh-DP, CP} \}$  のラベルとして付与される。

上記の素性共有に関する議論を考慮に入れると、Chomsky (2014:4) と Rizzi (2015:321) の LA の定義は、それぞれ、「共有されている最も顕著な素性の探索」「共有されている最も顕著な素性のラベルの付与」という点を付け加えて、(16) と (17) のように、修正されるべきである。<sup>3</sup>

- (16) LA, a special case of minimal search, seeks heads H or **shared prominent features F** within its search domain. It must take place at the phase level, as part of the Transfer operation.
- (17) LA: The category created by Merge inherits the label of the closest head or **the label of shared prominent features**.

---

<sup>3</sup> Chomsky (2013, 2014) では、2つの主要部が併合する  $\{H, H\}$  に関して、僅かではあるが、議論がなされている。ただし、2つの主要部の併合  $\{H, H\}$  は、不明な点が多く、本稿の議論にも関係しないため、説明を割愛する。

以上、2.1 節では、Chomsky (2013, 2014) の枠組みにおいて弁別的な仮定とみなされる自由併合と LA について概説した。2.2 節では、2.1 節の議論を踏まえた上で、素性共有によるラベル付けについて、より掘り下げた議論を行う。

## 2.2. LA における T と R の特異性：弱い主要部

2.1 節の最後では、2 つの非主要部が併合する際にラベル付けを行う方法として、移動を用いる方法と素性共有を用いる方法の 2 つがあることを見た。2.2 節では、機能主要部 T と R は、個別言語的ないしは普遍的に弱い主要部であると位置付けられるため、素性共有を用いる方法でしか適切なラベル付けができない場合があるという Chomsky (2014) の議論を見ていく。

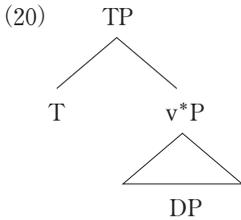
Chomsky (2014) は、2 つの機能主要部 T と R を個別言語的もしくは普遍的に弱い主要部と仮定し、ラベル付けに関して、特殊性があるという議論を行っている。ここでは、まず、2.1 節までの議論と密接に関連している T に関する議論を整理する。Chomsky (2014) は、機能主要部 T に強弱のパラメータを想定し、英語における T を弱い主要部であると仮定している。(18) と (19) を参照されたい。

(18) T is too “weak” to serve as a label. With overt subject, the SPEC-TP construction is labeled  $\langle \varphi, \varphi \rangle$  by the agreeing features. Therefore, English satisfies EPP. (Chomsky (2014: 6))

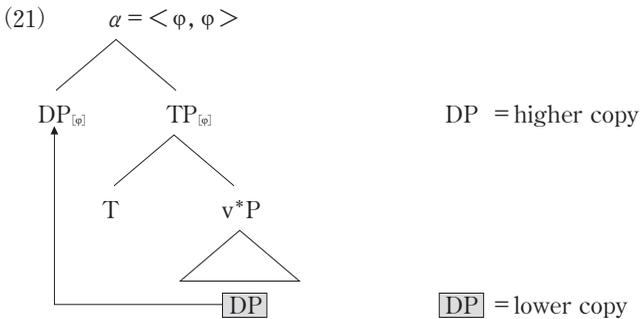
(19) In terms of labeling theory, Italian T, with rich agreement, can label TP and also {SPEC, TP}; for English, with weak agreement, it cannot, so that SPEC must be visible when LA applies. (Chomsky (2014: 6))

(18) と (19) の仮定に従うと、イタリア語の T は、一致が豊かであるために、

他の要素と併合することなしに、それ自体で、ラベル付けができる。他方、英語における T は、一致が豊かでないために、弱い主要部であると位置付けられる。それ自体では、ラベル付けができないため、他の要素と併合し、素性共有を行うことでの補強が必要になる。したがって、英語の場合、(20) のように、TP が他の要素と併合せず、T 指定部が空の状態であると、適切なラベル付けができず、派生が破綻してしまうことになる。



適切なラベル付けを行うためには、(21) に示すように、v\*P 内から DP を移動させ、TP と併合させることで、DP と TP での  $\phi$  素性の共有を可能にするのが最も典型的なラベル付けの方法となる。(21) の場合、結果的に、 $\{DP, TP\}$  に  $\langle \phi, \phi \rangle$  のラベルが付与される。



次に、Rの議論に移る。Chomsky (2013, 2014) は、分散形態論の分析を踏まえ、(22) を仮定している。

- (22) Assume that the substantive elements of the lexicon are roots, unspecified as to category, and that their category as nominal, verbal, etc., derives from merger with a functional element *n*, *v*, etc.

(Chomsky (2014:5))

この仮定に従うと、名詞や動詞、形容詞といった語彙的要素 (substantive elements) は、範疇未指定の root であり、*n* や *v* といった機能的要素と併合することによって、その範疇が決定されることになる。Chomsky は、root の例として、動詞のみしか扱っていないが、その議論に従うと、動詞は、Root の頭文字をとった R という範疇未指定の主要部として統語派生の中に組み入れられる。そして、それが機能主要部 *v*\* や *v* と併合することにより、動詞としての範疇が決定される。さらに、Chomsky (2014) は、この主要部 R に関して、(23) を仮定している。

- (23) Since R is universally too weak to label, it follows that the analogue of EPP for *v*\*P holds for both English and Italian, but here EPP refers to raising-to-object. Just as English T can label TP after strengthening by SPEC-T, so R can label RP after object-raising. (Chomsky (2014:7))

この仮定に従うと、R は、普遍的に弱い主要部であるため、英語の T と同様に、それ自体では、ラベル付けができず、他の要素と併合し、素性共有を行うことでの補強が必要になる。R の補強の典型例は、(24) に示す目的語繰り上げである。



素性を持つ *wh* 句 DP が CP と併合した場合、主要部 C は、ラベル付けのために、Q 素性を持つ必要がある。

以上、2.2 節では、機能主要部 T と R は、個別言語的ないしは普遍的に弱い主要部であると仮定されるため、素性共有を用いる方法でしか適切なラベル付けができない場合があることを示した。3 節では、2 節での議論を基に、素性共有にとって重要な役割を果たす素性の agreement について詳細な議論を行うことで、LA の精緻化を行う。

### 3. agreement の定義

3 節では、Chomsky (2013, 2014) がその重要性を示唆していながらも、詳細な議論がなされていない素性の agreement の定義について論じる。本節では、XP と YP が併合された構造 {XP, YP} において、XP と YP のそれぞれが解釈不可能素性を持ち、その 2 つの解釈不可能素性が素性の同一性を基に削除される「解釈不可能素性の相互的削除」が素性の agreement として定義されるべきだと主張する。そして、この主張に従うと、A 移動と A' 移動両方に関する事実を適切に説明できることを示す。

#### 3.1. 解釈不可能素性の相互的削除としての agreement

Chomsky (2013, 2014) は、XP と YP の間に素性の agreement が生じる場合にのみ、{XP, YP} で素性共有による適切なラベル付けが行われ、素性の matching だけでは、適切なラベル付けが行われないことを示唆している。Chomsky (2013) において、これが示唆されている部分を (27) に引用しておく。

- (27) Mere matching of most prominent features does not suffice [...]. What is required is not just matching but actual agreement, a stronger rela-

tion, [...] Sharpening this condition requires a closer analysis of *Agree*, which would carry us too far afield. (Chomsky (2013 : 45))

(27) に示すように、Chomsky (2013, 2014) は、LA におけるラベル付けが、素性の agreement と matching の違いによって、左右されると考えているが、これに関しては、一つの問題がある。それは、素性の agreement と matching の違いが重要であることが示唆されていながら、その違いが具体的に議論されていない点である。LA を妥当化し、強く推し進めて行く上では、この 2 つの違いを明確化しておく必要がある。筆者が本稿を執筆する発端となったのも、LA におけるラベル付けが生成統語論研究において非常に興味深い帰結をもたらす可能性があるにも関わらず、上記の引用部分を読むだけでは、agreement と matching の違いが十分に理解できなかったためである。<sup>4</sup> (27) の最後の引用部分からも伺えるように、素性の agreement と matching の違いを明確にするには、従来の枠組みにおいて素性照合の操作として用いられていた *Agree* 等を詳細に議論する必要があると思われる。

Chomsky (2014) は、脚注での示唆ではあるが、(28) に示すように、(27) よりも少々踏み込んだ記述を行っている。

(28) Note that labeling requires not just matching but agreement of the paired heads[.] Agreement holds for a pair of features <valued, unvalued>. (Chomsky (2014 : 10, fn.13))

---

<sup>4</sup> 日本語では、agreement と matching に「一致」「照合」「適合」等の定訳が与えられているが、この使い分けにも一定の基準があるわけではない。agreement に「一致」を用いる場合もあれば、「照合」を用いる場合もある。本稿が agreement と matching をアルファベットでそのまま表記している理由は、日本語の定訳を用いることで生じうる誤解や混乱を避けるためである。

(28) からは、値を持つ素性 (valued feature) と値を持たない素性 (unvalued feature) の対で生じるものを agreement と定義したい意図が伺える。値を持つ素性と値を持たない素性という二分の概念は、換言すると、2 節で言及した解釈可能素性と解釈不可能素性という二分の概念である。依然として、具体的な議論なしに、解釈可能素性と解釈不可能素性の対で生じるのが agreement と定義するのも今ひとつ腑に落ちないのは事実である。しかしながら、(28) での素性の解釈可能性に関する示唆は、(27) での *Agree* の議論の必要性に関する示唆と同様に、素性の agreement と matching の違いを明確にする上での重要な手掛かりを示していると言える。

本稿は、上記の示唆に従って、Chomsky (2000, 2001) の枠組みにおいて提唱されている素性照合操作 *Agree* の仕組みを詳細に見ていくことで、LA における素性の agreement と matching の違いに一つの可能性を提案したい。Chomsky (2000, 2001) では、素性の matching が (29a, b) のように定義されている。

- (29) a. Matching is feature identity. (Chomsky (2000 : 122))  
b. What is the relation Match? The optimal candidate is Identity ; we therefore take Match to be Identity. (Chomsky (2001 : 6))

この定義によれば、素性の matching とは、素性の同一性 (identity) である。したがって、2つの要素が単純に同一の素性を持っていれば、その2要素間で素性の matching が生じてよいことになる。これを踏まえた上で、素性の agreement の定義を、*Agree* の定義と併せて、示していく。*Agree* は、(30a, b) の引用にあるように、一定の探査領域内において、語彙項目 (lexical item : LI) と素性 (F) との間で agreement の関係を構築し、探査要素 Probe と目標要素 Goal の解釈不可能素性を削除する操作だと定義される。

- (30) a. A second is an operation we can call *Agree*, which establishes a relation (agreement, Case checking) between an LI  $\alpha$  and a feature F in some restricted search space (its *domain*). (Chomsky (2000 : 101))
- b. The erasure of uninterpretable features of probe and goal is the operation we called *Agree*. (Chomsky (2000 : 122))

そして、(31a, b) の引用にあるように、Probe と Goal が解釈不可能素性を持つことで、結果的に、matching が agreement を引き起こすという記述や Probe と Goal の matching が *Agree* を誘発し、それらが持つ解釈不可能素性が削除されるという記述もなされている。

- (31) a. Let us say that the uninterpretable features of [probe and goal] render their relevant subparts *active*, so that matching leads to agreement. (Chomsky (2001 : 4))
- b. Matching of probe and goal induces *Agree*, eliminating uninterpretable features that activate them. (Chomsky (2001 : 6))

上記をまとめると、素性の matching とは、単純に、関係性を持つ 2 つの要素間に同一の素性があることを指す一方で、素性の agreement とは、素性の同一性を基に、関係性を持つ 2 つの要素の解釈不可能素性が削除されることを指すと言える。

本稿は、Chomsky (2000, 2001) の *Agree* から得られる素性の agreement に関する定義が LA での素性の agreement にも当てはまり、この定義での agreement によってのみ、素性共有によるラベル付けがなされると主張する。ここからは、素性の agreement をより厳密に定義するために、*Agree* の仕組みをより深く掘り下げて見ていく。上記の議論に従うと、Chomsky (2000, 2001) の

*Agree* は、Probe が一定の探査領域において、同一の素性を持つ Goal を探索した上で、2つの解釈不可能素性が削除される操作だと定義される。<sup>5</sup> ここで注意したいのは、削除される2つの解釈不可能素性が同一性を持つわけではない点である。Chomsky (2000, 2001) の枠組みでは、同一性を持つ2つの素性は、解釈可能性が異なり、2つのうち解釈不可能な方が Probe に存在する。他方、Goal には、同一性を持つ素性の解釈可能な方が存在するのに加えて、もう一つの異なる種類の解釈不可能素性も存在する。この点を、まず、A 移動の具体例 (32a) を用いながら、示していく。

(32) a. John likes cats.

- b. [<sub>TP</sub> T<sub>[EPP][uφ]</sub> [<sub>v\*P</sub> John<sub>[φ][uCase]</sub> like cats ] ]
- c. [<sub>TP</sub> T<sub>[EPP][uφ]</sub> [<sub>v\*P</sub> John<sub>[φ][uCase]</sub> like cats ] ]
- ↑

DP が動詞句 *v\*P* 内から T 指定部に A 移動する場合、Probe である T は、EPP 素性 [EPP] に加えて、解釈不可能な φ 素性 [uφ] を持ち、Goal である DP は、[uφ] に対応する解釈可能な φ 素性 [φ] と解釈不可能な格素性 [uCase] を持つ。<sup>6</sup> (32b) において、Probe である T は、探査領域内を探索し、それが持つ [uφ] と同一の素性 [φ] を持つ DP を Goal として選択する。この φ 素性の同一性を基に、素性の削除が生じることになるが、ここで重要なのは、同一性を持つ T の [uφ] が削除されるのに付随して、DP の [uCase] も削除されるという点である。つまり、A 移動の場合、φ 素性が T と DP の 2 要素に共

<sup>5</sup> Chomsky (2000:122) では、*Agree* がより厳密に定義されている。この定義に従うと、Probe の探査領域は、それが c 統御する姉妹要素内の領域であり、Goal として複数の選択肢がある場合には、最も局所的なものが選択される。

<sup>6</sup> Chomsky (2000, 2001) では、[EPP] も解釈不可能素性であることが示唆されている。しかしながら、[EPP] は、[uφ] や [uCase] 等の一般的な解釈不可能素性とは、削除のされ方が異なるため、本稿では、[EPP] を解釈不可能素性の分類から除外して議論する。

通して存在する同一の素性であるが、T の持つ  $\phi$  素性が解釈不可能素性で、DP の持つ  $\phi$  素性が解釈可能素性なのである。DP には、 $[\phi]$  に加えて、 $[uCase]$  があるため、*Agree* において削除されるのは、(32c) の削除線で示すように、T の  $[u\phi]$  と DP の  $[uCase]$  の 2 つである。これを基に、DP が  $v^*P$  内から T 指定部に移動することで、 $[EPP]$  が充足される。

上記の A 移動に関する議論から、素性の agreement を厳密に定義すると、次のようになる。機能主要部 T が  $[u\phi]$  を持ち、語彙要素 DP が  $[\phi]$  と  $[uCase]$  持つ。A 移動において、素性の agreement とは、素性の同一性に基づき、T の  $[u\phi]$  が削除され、それに付随して、DP の  $[uCase]$  が削除されることを指すと定義できる。本稿は、2 つの要素が持つ 2 つの異なる解釈不可能素性が agreement によって削除されることを「解釈不可能素性の相互的削除」と呼ぶことにする。

次に、A 移動からの類推として、A' 移動にも同様の分析がなされていることを見ていく。Chomsky (2000, 2001) では、A 移動する要素が解釈可能性の異なる 2 つの素性を持つように、A' 移動する要素も同様の 2 種類の素性を持つという仮定がなされている。Chomsky (2000: 128) と Chomsky (2001: 47, fn. 49) の仮定に従うと、(33a) のような *wh* 句は、解釈可能な Q 素性  $[Q]$  と解釈不可能な *wh* 素性  $[uWh]$  の 2 つを持つ。<sup>7</sup>

(33) a. Which cat does John like?

b.  $[_{CP} \quad C_{[EPP][uQ]} \quad [_{TP} \quad \text{John like} \quad \text{which cat}_{[Q][uWh]} \quad ]]$

c.  $[_{CP} \quad \underbrace{C_{[EPP][\phi][Q]}} \quad [_{TP} \quad \text{John like} \quad \text{which cat}_{[Q][\phi][uWh]} \quad ]]$

(33b) では、Probe である C が解釈不可能な Q 素性  $[uQ]$  を持ち、それと同

<sup>7</sup> 解釈可能性の異なる 2 種類の素性を *wh* 句が持つという分析は、Shima (1999) や渡辺 (2005) でも提案されている。

一の素性 [Q] を持つ *wh*-DP の *which cat* を Goal として選択する。この Q 素性の同一性を基に、(33c) に示すように、C の [uQ] が削除され、これに付随して、*which cat* の [uWh] も削除される。この *Agree* を基に、*which cat* が C 指定部に移動することで、[EPP] が充足される。

Chomsky (2000, 2001) は、*wh* 移動しか扱っていないが、同様の分析が他種の A' 移動にも当てはまるという提案が他の先行研究においてなされている。例えば、Hoshi (2006) は、Chomsky (2000) の仮説を日本語の焦点化構文に拡張させ、取り立て詞「も」で標示されるような焦点要素が解釈可能な Focus 素性と解釈不可能な Focus 素性の 2 つを持つという分析を提案している。また、筆者自身も、Tanigawa (2009, 2011) において、英語及び日本語の話題化構文や焦点化構文について論じる際に、A' 移動する話題要素や焦点要素が解釈可能性の異なる 2 つの素性を持つという分析を提示した。Tanigawa (2009, 2011) に従うと、英語の話題化構文や焦点化構文は、(34) と (35) に示すような派生を持つ。<sup>8</sup>

(34) a. That picture, John gave to Mary.

b. [<sub>CP</sub> C<sub>[EPP][uTop]</sub> [<sub>TP</sub> John gave that picture<sub>[Top][uOp]</sub> to Mary ]]

c. [<sub>CP</sub> <sup>↑</sup>C<sub>[EPP]<sub>fuFoc</sub></sub> [<sub>TP</sub> John gave that picture<sub>[Top]<sub>fuOp</sub></sub> to Mary ]]

(35) a. THAT PICTURE John gave to Mary.

b. [<sub>CP</sub> C<sub>[EPP][uFoc]</sub> [<sub>TP</sub> John gave that picture<sub>[Foc][uOp]</sub> to Mary ]]

c. [<sub>CP</sub> <sup>↑</sup>C<sub>[EPP]<sub>fuFoc</sub></sub> [<sub>TP</sub> John gave that picture<sub>[Foc]<sub>fuOp</sub></sub> to Mary ]]

<sup>8</sup> (35a) の焦点要素には、典型的に、音韻強勢が置かれる。(34a) の話題化構文と表記上の区別をするために、ここでは、音韻強勢が置かれる焦点要素を大文字で表記している。

話題化構文 (34a) では、(34b, c) に示すように、A' 移動する話題要素が解釈可能な話題素性 [Top] と解釈不可能なオペレータ素性 [uOp] を持ち、C が持つ解釈不可能な話題素性 [uTop] との *Agree* によって、[uOp] と [uTop] が削除される。他方、焦点化構文 (35a) では、(35b, c) に示すように、A' 移動する焦点要素が解釈可能な焦点素性 [Foc] と解釈不可能なオペレータ素性 [uOp] を持ち、C が持つ解釈不可能な焦点素性 [uFoc] との *Agree* によって、[uOp] と [uFoc] が削除される。また、Tanigawa (2009, 2011) は、この分析を基に、Chomsky (2000, 2001) の *wh* 移動に関する分析を、(36b, c) のように、修正し、異種の A' 移動を可能な限り平行的に扱う試みを提示している。

(36) a. Which cat does John like?

b. [<sub>CP</sub> C<sub>[EPP][uQ]</sub> [<sub>TP</sub> John like which cat<sub>[Q][uOp]</sub> ]]

c. [<sub>CP</sub> C<sub>[EPP][uOp]</sub> [<sub>TP</sub> John like which cat<sub>[Q][uOp]</sub> ]]

(36b, c) では、Chomsky (2000, 2001) において *wh* 句に仮定されていた [uWh] が話題要素や焦点要素が持つものと同じ [uOp] に置き換えられている。

上記の A' 移動の議論から、素性の agreement を厳密に定義すると、次のようになる。F が Q, Top, Foc のいずれかになる形で、機能主要部 C が [uF] を持ち、DP 等の語彙要素が [F] と [uOp] 持つ。<sup>9</sup> A' 移動における素性の agreement とは、F 素性の同一性にに基づき、C の [uF] が削除され、それに付随して、DP 等の [uOp] が削除されることを指すと定義できる。A' 移動でも、A 移動と同様に、「解釈不可能素性の相互的削除」が起こる場合が agreement

<sup>9</sup> Chomsky (2014: 10, fn.13) では、C の Q 素性が解釈可能素性で、*wh* 句の Q 素性が解釈不可能素性であるという逆の示唆がなされている。本稿は、A 移動と A' 移動における agreement を平行的に扱う意味でも、Chomsky (2000, 2001) の仮定を採用する。

ということになる。

上記の議論をまとめると、*Agree* においては、素性の同一性にに基づき、語彙要素と機能主要部が持つ異なる2つの解釈不可能素性が相互的に削除される場合が素性の agreement と定義されることになる。本稿は、この定義が LA での素性共有の必要条件となる素性の agreement にも当てはまると主張する。すなわち、XP と YP が併合した  $\{XP, YP\}$  では、XP と YP のそれぞれが解釈不可能素性を持ち、その2つの解釈不可能素性が素性の同一性を基に削除される「解釈不可能素性の相互的削除」が素性の agreement として定義される。そして、この定義での素性の agreement が起こることではじめて、XP と YP による素性共有ができる。

次の3.2節では、移動現象の観点から、この主張の妥当性を示すが、それを行うには、素性の agreement に関連した追加的な議論や主張が必要になる。本節では、最後に、素性の agreement に関連した一つの条件を議論し、それが LA にも当てはまると主張を行う。Chomsky (2000, 2001) の枠組みでは、Goal が活性状態 (active) にないと、Goal に *Agree* 及び移動を適用できないとする旨の活性条件 (Activation Condition) が不可欠である。Chomsky (2000, 2001) は、活性条件という名称を用いていないが、(37) の引用がこの条件に関わる記述である。

- (37) [I]f structural Case has already been checked (deleted), the phrase P (G) is “frozen in place,” unable to move further to satisfy the EPP in a higher position. More generally, uninterpretable features render the goal active, able to implement an operation: to select a phrase for Merge (pied-piping) or to delete the probe. The operations *Agree* and *Move* require a goal that is both local and active. (Chomsky (2000: 123))

(37) の引用から言葉を借りると、Goal が活性状態にあるということは、Goal が持つ解釈不可能素性が削除されていない状態を指す。活性条件に従うと、ある要素は、一旦、解釈不可能素性を削除されてしまうと、*Agree* 及び移動の適用対象にならない。活性条件が重要な役割を果たす例として、(38) に示す非適正移動 (improper movement) が挙げられる。

(38) a. \* John seems likes cats.

b.  $\left[ \begin{array}{c} \text{TP} \\ \uparrow \\ \text{T}_{[\text{EPP}][\text{u}\phi]} \end{array} \left[ \begin{array}{c} \text{v}^* \text{P} \\ \text{John}_{[\phi][\text{uCase}]} \text{ like cats} \end{array} \right] \right]$

c.  $\left[ \text{TP} \text{T}_{[\text{EPP}][\text{u}\phi]} \text{ seem} \left[ \text{TP} \text{John}_{[\phi][\text{uCase}]} \text{T}_{[\text{EPP}][\text{u}\phi]} \left[ \text{v}^* \text{P} t \text{ like cats} \right] \right] \right]$

(38a) は、非適格な文であるが、この文では、(38b, c) に示すように、DP である *John* が基底生成されている埋め込み節の  $\text{v}^* \text{P}$  内から主節に抜き出されている。<sup>10</sup> (38b) に示すように、 $[\text{u}\phi]$  を持つ埋め込み節の T が併合されると、それが Probe となり、同一性を持つ *John* の  $[\phi]$  を Goal として *Agree* が生じる。この *Agree* によって、*John* の  $[\text{uCase}]$  が削除され、埋め込み節の T 指定部に移動する。派生が主節に進み、(38c) に示すように、 $[\text{u}\phi]$  を持つ主節の T が併合されると、それが Probe となり、同一性を持つ  $[\phi]$  を持つ要素を Goal として探索する。この構造において、埋め込み節の T 指定部に移動した *John* が  $[\phi]$  を持つ唯一の要素だが、*John* は、この時点で  $[\text{uCase}]$  を既に削除されている非活性要素であるため、Goal として選択することができない。結果的に、主節の T の  $[\text{u}\phi]$  が削除されずに残ってしまうため、この派生は、破綻してしまう。

A' 移動においても、活性条件は、重要な役割を果たす。(39a) は、*wh* 句の

<sup>10</sup> (38) の埋め込み節は、CP ではなく TP であると仮定する。これは、補文標識 *that* の有無で交替がある埋め込み節において、*that* が現れない場合は、*that* 及びそれが位置する主要部 C が消失しているという Chomsky (2014: 7–8) の分析にも沿うものである。

非適正移動の例である。

(39) a. \* Which cat do you wonder John likes?

b.  $[_{CP} \ C_{[EPP][uQ]} \ [_{TP} \ \text{John likes} \ [_{v^*P} \ \text{which cat}_{[Q][uWh]} \ \ ]]]$

c.  $[_{CP} \ C_{[EPP][uQ]} \ \text{you wonder} \ [_{CP} \ \text{which cat}_{[Q][uWh]} \ C_{[EPP][uQ]} \ [_{TP} \ \dots \ ]]]$

この文の非容認性も、A 移動の場合と同様の観点から導かれる。(39b) に示すように、*wh*-DP の *which cat* は、埋め込み節の  $v^*P$  内に基底生成されている。動詞 *wonder* によって選択される埋め込み節の C は  $[uQ]$  を持たなければならないと仮定すると、埋め込み節の C が Probe となり、同一性を持つ素性  $[Q]$  を持つ *which cat* を Goal として *Agree* が生じる。この *Agree* によって、*which cat* は、 $[uWh]$  を削除され、埋め込み節の C 指定部に移動する。派生が (39c) に示す主節の段階に進むと、 $[uQ]$  を持つ主節の C が Probe となり、同一性を持つ  $[Q]$  を持つ要素を Goal として探索する。この構造において、埋め込み節の C 指定部に移動している *which cat* が  $[Q]$  を持つ唯一の要素だが、*which cat* は、この時点で  $[uWh]$  を既に削除されている非活性要素であるため、Goal として選択することができない。結果的に、主節の C の  $[uQ]$  が削除されずに残ってしまうため、この派生は、破綻してしまう。

本稿は、上記の活性条件が LA においても重要な役割を果たすと主張する。すなわち、 $\{XP, YP\}$  において、XP と YP のいずれかが解釈不可能素性を既に削除されている場合には、素性の *agreement* が起こらず、素性共有及びそれに基づくラベル付けができないと主張する。次の 3.2 節では、本節で提示した素性の *agreement* の定義及び活性条件に関する主張の妥当性を移動現象の観点から論じる。

以上、3.1 節では、素性の *agreement* をどのように定義すべきかについて論じた。3.2 節に移る前に、解釈不可能素性の削除と値の付与の関係について述

べておきたい。上でも言及したが、値を持つ素性と値を持たない素性という二分の概念は、換言すると、解釈可能素性と解釈不可能素性という二分の概念である。本質的に、解釈可能素性は、値を持つが、解釈不可能素性は、値を持たないからである。例えば、解釈不可能な  $\phi$  素性 [u $\phi$ ] は、人称・数・性に関して値を持たない「値未指定」の素性である。ただし、解釈不可能素性は、本質的に値を持たないものの、agreementにより削除されると、値を付与されることになる。例えば、[u $\phi$ ] は、agreementによって削除されることで、人称・数・性に関する値を agreementの対象である DPから譲り受け、この値がインターフェースにおいて、音韻・形態的に具現化される。Chomsky (2014: 10, fn. 13) の示唆に厳密に従えば、素性の agreementを素性が値を持つか否かによって定義するべきかもしれない。ただし、素性が値を持つ場合には、もともと、解釈可能素性であって、本質的に値を持つ場合と、解釈不可能素性であったものが削除されて値を付与されている場合との2つがある。したがって、素性が値を持つか否かによって agreementの定義を行うのは、曖昧で、かつ、混乱を招く可能性がある。よって、本稿では、素性が値を持つか否かではなく、素性が解釈可能か否かという観点から、素性の agreementを定義している。

### 3.2. LAの観点からの移動現象の説明

3.2節では、いくつかの移動現象をLAの観点から説明する上で、3.1節で提示した素性の agreementの定義及び活性条件に関する主張が妥当であることを示す。

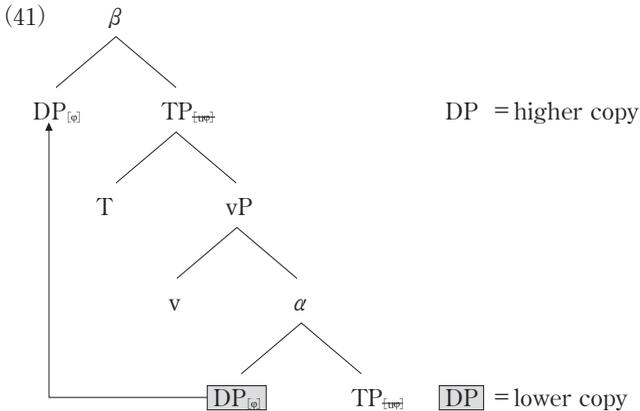
3.1節での議論の中心部分は、2015年1月時点から筆者の頭の中にあったものである。偶然ではあるが、筆者と同様の見解を、後藤亘(個人談話)も有しており、Goto (2015)において、Chomsky (2013, 2014)の枠組みを踏まえた非常に説得力のある議論によって、その妥当性を示している。<sup>11</sup>したがって、3.2

<sup>11</sup> 本稿を執筆する上で、後藤亘氏との個人談話で得た情報及びGoto (2015)の議論は不

節では、まず、Goto (2015) の議論を見ていくことにする。Goto (2015) が焦点を当てているのは、本稿が 3.1 節で示した (40) に再掲する非適正移動である。

- (40) a. \* John seems likes cats.  
 b. [<sub>TP</sub> John seem [<sub>TP</sub> <John> like cats ]]

(40a) では、(40b) に示すように、主語 DP の *John* が埋め込み節の T 指定部から主節の T 指定部へ移動している。この派生において、DP と TP の素性共有が、agreement ではなく matching で行われるとしよう。つまり、DP である *John* が解釈可能な  $\varphi$  素性  $[\varphi]$  のみを持ち、DP と TP の素性共有が  $[\varphi]$  という同一の素性を持つだけで行われるとしよう。すると、埋め込み節と主節の両方でラベル付けが適切に行われることになる。(41) を参照されたい。



可欠であった。この場を借りて、後藤亘氏に感謝したい。

まず、DP が埋め込み節の TP と併合すると、 $\{_{\alpha} DP, TP\}$  が  $\langle \varphi, \varphi \rangle$  のラベルを付与される。次に、その DP が主節に移動し、主節の TP と併合すると、 $\{_{\beta} DP, TP\}$  が  $\langle \varphi, \varphi \rangle$  のラベルを付与される。ここで注意したいのは、移動によってできた元位置の下位コピーもそのフェーズ内であれば、LA にとって可視的であるということである。Chomsky (2013) では、(42) として再掲するように、元位置の下位コピーが LA にとって非可視的であると仮定されていたが、Chomsky (2014) では、(43) のように、あるフェーズで下位コピーがラベル付けに関与している場合、そのラベル付けに関する情報は、当該のフェーズ内では、利用可能であるという (42) を改定した仮定がなされている。

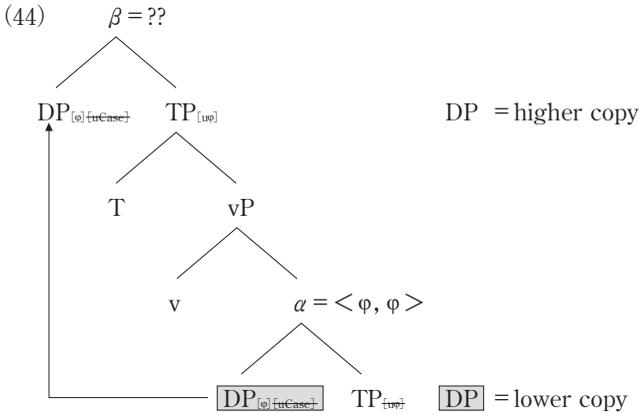
(42) The intuitive idea is that the lower copy of XP is invisible to LA, since it is part of a discontinuous element, so therefore  $[\{XP, YP\}]$  will receive the label of YP. (Chomsky (2013 : 44))

(43) The basic principle is that memory is phase-level[.] Hence at [some] phase level [...], if some element [...] has already been labeled, the information is available and [it] stays labeled. (Chomsky (2014 : 8))

したがって、(41) では、埋め込み節と主節の両方で、ラベル付けが適切に行われ、それ以外の点においても派生の破綻を招くような問題点はないため、誤って、この派生が収束すると予測されてしまう。

上記のように、DP である *John* が解釈可能な  $\varphi$  素性  $[\varphi]$  のみを持ち、DP と TP の素性共有が単純に  $\varphi$  素性の同一性、すなわち、matching のみで行われるとすると、LA においては、非文が誤って適格な文だと予測されてしまう。Goto (2015) は、この問題を克服するために、本稿が 3.1 節で行った主張と同様の主張を行っている。すなわち、DP は、解釈可能な  $\varphi$  素性  $[\varphi]$  に加えて、解釈不可能な格素性  $[uCase]$  を持つ。そして、T が持つ解釈不可能な  $\varphi$

素性  $[u\phi]$  との agreement によって、DP の  $[uCase]$  と T の  $[u\phi]$  が相互に削除される場合にはじめて、素性共有が起こる。DP は、一旦、 $[uCase]$  を削除されてしまうと、非活性要素として扱われるため、その後の agreement に関与できない。この主張に従って、(40a) の派生を再検討すると、(44) のように、主節で適切なラベル付けが行われないことになる。



(44) では、DP が埋め込みの TP と併合し、解釈不可能素性の相互的削除が行われることで、agreement 及び素性共有が生じ、 $\{_{\alpha} DP, TP\}$  に  $\langle \phi, \phi \rangle$  のラベルが付与される。その後、DP は、自由併合によって、主節の T 指定部へと移動し、TP と併合する。しかしながら、DP は、既にその  $[uCase]$  を削除されているため、3.1 節で提示した活性条件に関する主張に従って、主節 TP の  $[u\phi]$  と agreement を起こすことができない。よって、主節の  $\{_{\beta} DP, TP\}$  では、素性共有によるラベル付けができないことになる。2.2 節で見たように、英語の T は、弱い主要部と仮定されるため、何らかの語彙要素が TP に併合して、素性共有によるラベル付けを行う必要がある。しかしながら、主節の  $\{_{\beta} DP, TP\}$  は、素性共有によるラベル付けがなされないため、結果的に、イ

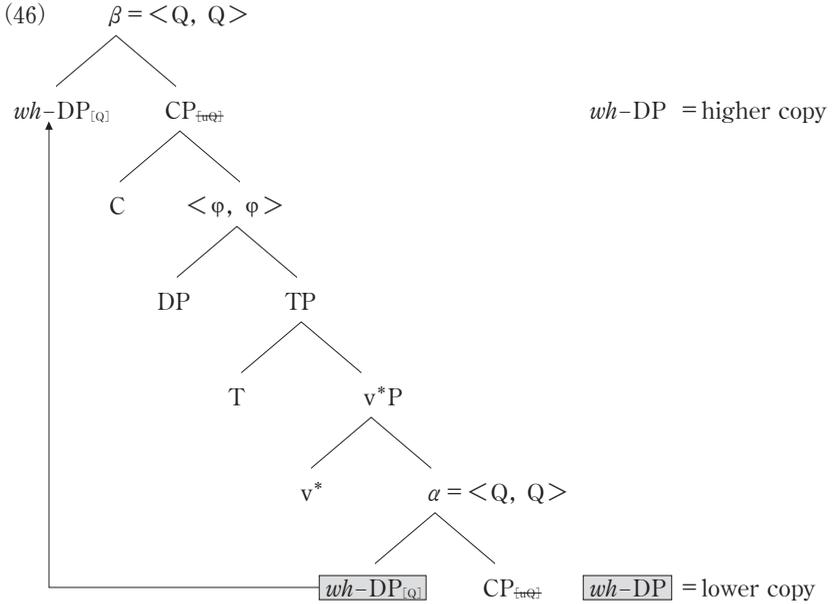
インターフェースにおいて派生が破綻してしまうことになる。このように、「解釈不可能素性の相互的削除」を素性共有の必要条件にすることによってはじめ、(40a) の派生を的確に排除できることになる。

Goto (2015) は、解釈不可能素性の相互的削除による素性共有の妥当性を A 移動の観点から示しているが、同様の議論は、A' 移動の観点からも提示できる。これも 3.1 節で示した非適正移動の例であるが、(45a) では、(45b) に示すように、*wh* 句の *which cat* が目的語位置から埋め込み節の C 指定部を経由して、主節の C 指定部へ移動している。

(45) a. \* Which cat do you wonder John likes?

b. [<sub>CP</sub> which cat [<sub>TP</sub> you wonder [<sub>CP</sub> <which cat> [<sub>TP</sub> ... t ]]]]

ここで問題になるのは、埋め込み節の CP と主節の CP でのラベル付けである。*wh* 句が解釈可能な Q 素性 [Q] のみを持ち、*wh* 句と CP の素性共有が Q 素性という同一の素性を持つだけの matching によって行われると想定する。すると、(46) に示すように、LA の観点から見ると、埋め込み節の  $\{_{\alpha} wh\text{-DP}, CP\}$  と主節の  $\{_{\beta} wh\text{-DP}, CP\}$  の両方で、ラベル付けが適切に行われることになる。

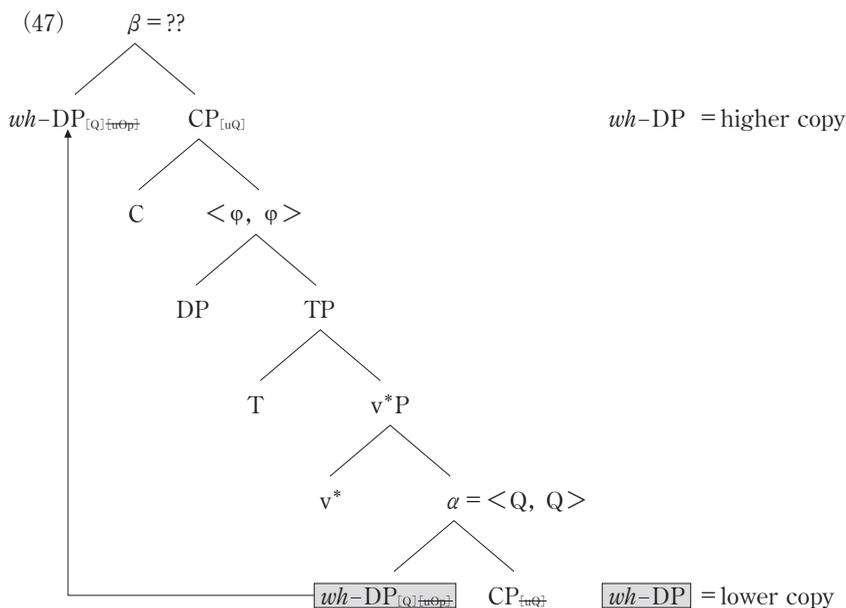


(43) の仮定に従うと、移動によってできた元位置の下位コピーもそのフェーズ内であれば、LAにとって可視的な要素として利用可能である。加えて、ここでは、主節の  $v^*P$  がフェーズにならず、埋め込みの節の主要部  $C$  及び  $C$  指定部から上の部分が同じフェーズ内にあると仮定しよう。<sup>12</sup> そうすると、埋め込みの  $C$  指定部にある *wh*-DP の下位コピーも LA にとって可視的な要素として利用可能であるため、埋め込み節の  $\{_{\alpha} wh\text{-DP}, CP\}$  に  $\langle Q, Q \rangle$  のラベルが付与されるはずである。また、*wh* 句が  $[Q]$  のみを持ち、素性共有が素性の matching によって行われるとすると、主節の  $\{_{\alpha} wh\text{-DP}, CP\}$  にも  $\langle Q, Q \rangle$  のラベルが付与されるはずである。それ以外の点においても派生の破綻を招くような問題点はないため、誤って、(45a) の派生は、収束すると予測されてし

<sup>12</sup>  $v^*$  のフェーズ性の取り消し及びそのラベル付けとの関連については、Epstein, Kitahara, and Seely (2015) の議論を参照されたい。

まう。

この問題は、本稿が 3.1 節で提示した主張に従うと、LA の観点からも適切に処理できる。すなわち、*wh* 句は、解釈可能な Q 素性 [Q] に加えて、解釈不可能なオペータ素性 [uOp] を持つ。そして、C が持つ解釈不可能な Q 素性 [uQ] との agreement によって、*wh* 句の [uOp] と C の [uQ] が相互に削除される場合にはじめて、素性共有が起こる。*wh* 句は、一旦、[uOp] を削除されてしまうと、非活性要素として扱われるため、その後の agreement に関与できない。この主張に従って、(45a) の派生を再検討すると、(47) に示すように、主節の  $\{ {}_s wh\text{-DP}, CP \}$  でのラベル付けが適切に行われなくなることになる。



(47) では、*wh* 句が埋め込みの CP と併合し、解釈不可能素性の相互的削除が

行われることで、agreement 及び素性共有が生じ、 $\{_{\alpha} \text{DP, CP}\}$  に  $\langle \text{Q, Q} \rangle$  のラベルが付与される。その後、*wh* 句は、自由併合によって、主節の C 指定部へと移動し、CP と併合するが、その  $[\text{uOp}]$  は、既に削除されているため、活性条件に従って、主節 CP の  $[\text{uQ}]$  と agreement を起こすことができない。主節の  $\{_{\beta} \text{wh-DP, CP}\}$  には、ラベルが付与されなくなるため、インターフェースにおいて派生が破綻してしまう。これによって、(45a) の非文法性が導かれる。

以上、3.2 節では、非適正移動を LA の観点から適切に説明する上で、3.1 節で提示した素性の agreement の定義及び活性条件に関する主張が妥当であることを示した。

#### 4. まとめ

本稿では、Chomsky (2013, 2014) の枠組みを、LA に焦点を当てながら、概説した上で、LA において重要な役割を果たす素性の agreement がどのように定義されるべきかについて論じた。素性の agreement の定義として、「解釈不可能素性の相互的削除」を提案し、この定義での agreement と活性条件を用いることで、LA の観点から非適正移動を適切に説明できることを示した。

1 節や 3.1 節で述べたように、LA におけるラベル付けの仕組みは、今後、生成統語論研究において非常に興味深い帰結をもたらすと考えられる。実際に、筆者も、LA を用いることによって、本稿では扱わなかった A' 移動に関する現象に新しい分析や説明を提示できる旨の研究に取り組んでおり、Tanigawa (To Appear) では、LA の観点から英語の文主語構文を議論する予定である。筆者を含め生成統語論研究者が今後の研究を行う上で、本稿での議論が少しでも有用になることを期待したい。

## 参考文献

- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Chomsky, Noam (2000) “Minimalist Inquiries: The Framework,” *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89–155, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Chomsky, Noam (2001) “Derivation by Phase,” *Ken Hale: a Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1–52, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Chomsky, Noam (2008) “On Phases,” *Foundational Issues in Linguistic Theory*, ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria L. Zubizarreta, 133–166, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Chomsky, Noam (2013) “Problems of Projection,” *Lingua* 130, 33–49.
- Chomsky, Noam (2014) “Problems of Projection: Extensions,” ms., MIT. [Published in 2015 in *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simona Matteini, 3–16, John Benjamins, Amsterdam.]
- Epstein, Samuel D., Hisatsugu Kitahara, and T. Daniel Seely (2015) “Phase-Cancellation by Pair-Merge,” *The Handbook of the 150th Annual Meeting of the Linguistic Society of Japan*, 236–241.
- Goto, Nobu (2015) “On the Necessity of Labeling in Narrow Syntax: Exploring a Third Approach,” Paper presented at Keio Linguistic Colloquium, March 14th.
- Hoshi, Koji (2006) “On the Nature of Focus Feature Organization: Toward a Unified Account of the Additive *Mo* ‘Also,’” *The Proceedings of the 78th General Meeting of the English Literary Society of Japan*, 101–103.
- Rizzi, Luigi (2015) “Cartography, Criteria, and Labeling,” *Beyond Functional Sequence: The Cartography of Syntactic Structures*, ed. by Ur Shlonsky, 314–338, Oxford University Press, New York.
- Shima, Etsuro (1999) “Two Types of Wh-features,” *Lingua* 107, 189–206.
- Tanigawa, Shin-ichi (2009) “A Split Feature Analysis of Topicalization and Locative Inver-

sion,” *JELS* 26, 299–308.

Tanigawa, Shin-ichi (2011) “Two Types of Topic and Focus Features,” *Philologia* 42, 61–88.

Tanigawa, Shin-ichi (To Appear) “Revisiting Sentential Subjects from Labeling Algorithm,” *The Conference Handbook of the 33rd Annual Conference of the English Linguistic Society of Japan*, The English Linguistic Society of Japan.

渡辺明 (2005) 『ミニマリストプログラム序説』大修館図書 東京.